



ステップファミリーにおける家族関係の長期的変化 再インタビュー調査からの知見

著者	野沢 慎司, 菊地 真理
雑誌名	明治学院大学社会学部附属研究所研究所年報 = Bulletin of Institute of Sociology and Social Work, Meiji Gakuin University
巻	40
ページ	153-164
発行年	2010-03-20
その他のタイトル	Long-term Changes in Stepfamily Relations: Findings from Re-interviews with Parents and Stepparents in Japan
URL	http://hdl.handle.net/10723/1840

ステップファミリーにおける家族関係の長期的変化 ——再インタビュー調査からの知見——

野 沢 慎 司 菊 地 真 理

1. 研究の経緯と問題設定——ステップファミリー研究への時間軸の導入

ステップファミリーとは、家族メンバーのうち「成人の少なくともひとり以前（パートナー）関係での子どもをもつ家族」と定義づけられている（Ganong and Coleman, 2004 : 2）。言い換えれば、^{けいおやこ}継親子関係を含む家族である。本稿は、ステップファミリーに関する共同研究プロジェクトの一環として行われた調査結果の第一次報告である¹⁾。現在の研究母体である「ステップファミリー研究会」は、明治学院大学社会学部附属研究所の特別推進プロジェクト「現代社会における技術と人間」のサブグループ「ソーシャル・サポートにおけるCMC」研究の一環として、2001年にステップファミリー調査を開始したことに端を発している。研究の端緒となった調査票調査などの分析結果については、ソーシャル・サポートにおけるCMC研究グループ編（2002）および野沢ほか（2003）で中間的成果を報告している（この特別推進プロジェクトにおけるステップファミリー調査結果の最新報告としては野沢 2008 a および茨木 2008を参照）。

我々は、2001年に誕生した当事者支援団体、ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン（SAJ）と連携しつつ、日本のステップファミリーに関する学際的な共同研究を進めてきた。そうした研究と支援実践の相互交

流を含む成果は、当事者を含む一般的な読者を対象にした野沢ほか編（2006）の刊行ほか一連の研究論文などのかたちで公表してきた（野沢ほか 2006；野沢 2006, 2009 a, 2009b；Nozawa 2008；菊地 2003, 2005；茨木 2008；茨木・吉本 2007；早野 2006など）。アメリカを中心としたステップファミリー研究先進国における知見を参照しながら、これまでまったくと言ってよいほど研究されてこなかった日本のステップファミリーの特徴が、社会学・社会福祉学・法学など複数の視角から次第に明らかにされてきた。

具体的には、①2001年から2003年にかけて実施されたステップファミリーにおける継親・実親166人（郵送による回答140人、電子メールによる回答26人）を対象とする「調査票調査」、および②2001年から2005年にかけて実施した継親・実親60名（男性11人とそのパートナー11人を含む女性49人）に対する「第一次インタビュー調査」によって、おもにステップファミリーの家族形成における役割ストレインとそれへの対処やソーシャル・サポート（ネットワーク）の効果に関する知見が蓄積されてきた。とりわけ継親役割の遂行や継親子関係の形成が難しいこと（Ganong and Coleman 2004；Felker et al. 2002；Pasley and Ihinger-Tallman 1982；Visher and Visher 1991=2001など）、さらにもそのなかでも継母役割の遂行や継母子関係の形成

がストレス源になりやすいこと (Fine and Schwebel 1992; Levin 1997; Nielsen 1999; Whitsett and Land 1992など) は、①の調査票調査による数量データ分析 (野沢 2002, 2008 a) および②の事例インタビュー調査の質的データ分析 (菊地 2005, 2009; 野沢ほか 2006; Nozawa 2008; 野沢 2009 b) の両方から見出されている。この点において、我々の研究は北米の既存研究の知見を基本的に支持してきた。

ステップファミリーは、とくにその家族形成の初期段階において大きな困難に直面すると指摘されてきた (例えば、Visher and Visher 1991=2001)。日本における我々のインタビュー事例においても、結婚後の新しい生活が始まってしばらくすると結婚前後の初期段階に抱いていた期待とはかけ離れた現実、とりわけ継親子関係形成の難しさに直面して大きなストレスを感じる例が多く見られた (菊地 2005, 2009; 野沢ほか 2006; Nozawa 2008, 野沢 2009 a)。

しかし、「ステップファミリー周期 (step-family cycle)」という視点を提唱したアメリカの臨床心理学者ペーパーナウによれば、このような家族形成の初期段階における困難は、「ステップファミリーの正常な家族発達 (normal stepfamily development)」における一段階の特徴にすぎない。緊密に結束した親子関係が存在する一方で、夫婦関係はまだ脆弱であり、しかも (元配偶者など) 世帯外部からの介入の可能性もあるというステップファミリーに固有の家族構造は、病理的なものとみなされるべきではないと彼女は主張する。それは、ステップファミリーの正常な家族発達における出発点にすぎないと言うのである (Papernow 1984: 356)。

ペーパーナウは、ステップファミリーの初期 (初発段階) には、「第 1 段階: 夢想期 (fantasy)」に始まり、「第 2 段階: 同化期 (assimilation)」、「第 3 段階: 感知期 (awareness)」と続

く 3 段階を設定する。最初期の「夢想期」においては、ステップファミリーを作ろうとしている夫婦の多くが非現実的な期待 (fantasy) を抱きがちである。しかし、具体的な生活が始まる次の段階に至ると、継親が既存の親子関係のなかに入り込めずに疎外感、嫉妬、拒絶感、混乱、居心地の悪さなど否定的な感情が生じるなど、新たな家族を作るという当初の夢が暗転するような経験をするとされる (Papernow 1984: 357-358)。しかし、その後中期 (再構造化段階) にあたる「第 4 段階: 始動期 (mobilization)」、「第 5 段階: 行動期 (action)」の 2 段階、および後期 (凝固化段階) に含まれる「第 6 段階: 密着期 (contact)」、「第 7 段階: 結末期 (resolution)」の 2 段階から成る合計 7 段階の周期を提案する。彼女自身のインタビュー調査では、早いケースでは 4 年間、平均的なケースでは 7 年間をかけてこの周期の全段階を経験したとされる。ただし、遅いケースでは 5~12 年間も初期段階から抜け出せずに、結局離婚に至ったケースもあったという (Papernow 1984)。

要するに、このような周期論にしたがえば、ステップファミリーは、初期段階から中期段階にかけて、大きな葛藤を経験するのが通例であり、ストレスを伴う家族関係の再編・再調整を経て、数年の時間をかけて家族関係の深化や強化が達成されることになる。だとするならば、ステップファミリーの家族過程の分析においては、一時点の状況や関係の質に着目するだけでは不十分であり、長期の時間軸のなかにおける関係形成過程として捉える視点が必要になってくる。親の離婚・再婚を経験した子どもたちに成人後に再インタビューしたアメリカの調査研究が示唆しているように、回想法によって長期的な変遷を視野に収めることで、困難やストレスを乗り越え、個人や関係が成長・発達する側

面が捉えられるからである (Ahrons 2004 = 2006)。

しかし、ペーパーナウの周期論が関係の深化・強化へと向かう単線的な発達周期を想定している点に対しては批判もある。53組のステップファミリーに対して、「転機」となった出来事などによって最初の4年間の変化を回想してもらったデータを分析した研究からは、ステップファミリーの発達の道筋に5つのパターンが導かれた (Baxter et al. 1999)。この研究は、必ずしも一定の順序で発達段階を辿って単線的に家族の絆や家族らしさの感覚が深まるわけではないこと、家族関係形成の軌道には個別性と多様性が高いことを示唆している (Braithwaite et al. 2001も参照)。さらに、ペーパーナウの研究が提唱した発達段階説は、継親の経験に基づく視点から設定されており、ステップファミリーの実親が経験する家族過程がうまく取り入れられていないという批判もある (Arnaut et al. 2000)。単線的な発達周期説と多様な軌道説のどちらを想定するかについては、慎重な検討が必要である。

いずれにしても、日本におけるステップファミリーの関係形成過程およびその多様性を分析するにあたって時間軸を導入する意義は大きい。我々の「第一次インタビュー調査」は、協力者の多くが比較的初期段階にあるケースを中心にした一時点での調査であった。インタビュー時点で結婚していなかった4ケースを除く45ケースの平均結婚年数は4年7ヶ月であった(6ヶ月~16年)。そのため、導かれた知見はおそらく困難な経験が集中的に生じやすい比較的初期段階の家族経験に偏る傾向を免れなかった。家族形成初期の混乱やストレスに対してどのような対処が取られ、時間の経過のなかで家族関係がどのような変遷を見せるのかを複数時点で観察し、長期的視点で再検討する必要がある。

る。

そこで、「第一次インタビュー調査」から数年を経た時点で、その協力者の一部に再インタビューを実施することにした。少数の事例からのデータであるため、ステップファミリーの家族関係形成における道筋の多様性や共通性を描くには不十分であるが、どのような出来事や条件が家族関係にどのような変化をもたらすのかを考察するため探索的なデータ収集がこの調査の目的である。

2. 「第二次インタビュー調査」の方法と協力者

2001年6月から2005年11月に実施した「第一次インタビュー調査」の協力者(継親・実親60名)のうち、カップルで協力いただいたケースを中心に有意抽出して連絡を取り、再調査依頼に応じていただいた6家族、10名(4組の夫婦参加と2人の妻のみ参加)に2008年6月から2009年10月にかけて再インタビューした。これを「第二次インタビュー調査」と呼ぶ。前回インタビューからの経過時間は、最短5年7ヶ月、最長7年4ヶ月、平均6年5ヶ月であった。

この調査は個人単位のインタビューとして実施し、カップルで協力していただいた場合も夫と妻を個別に別室で行った。場所は、明治学院大学の施設(社会学部付属研究所の面接室など)のほか、状況に応じて民間の会議室、カラオケボックス、協力者の自宅など多様な場所を使用した。比較的静かで周囲から隔離された落ち着いた場所を設定した。インタビューの時間は、協力者の都合で1時間程度に終わった1ケースを除けば、他のケースは2時間前後に渡った。すべてのインタビューが録音され、それを逐語的に文字化した原稿に基づいて分析した。インタビューの形式は、共通の項目を設定するが、自由に語っていただく半構造化インタビューの形式で行い、前回インタビューから現

在までに家族内で経験された主要なライフイベントについて尋ね、夫婦・親子・継親子関係にどのような変化が生じているかを探った。その際、親族・友人および元配偶者などとの関係を含む世帯外ネットワークやステップファミリー支援団体との関わりなどについても質問して、変化や多様性を生み出す条件を探索した。

インタビューに協力いただいた6人の妻たちの年齢は、30代が2人、40代が3人、50代が1人である。4人の夫たちについては、40代と50代が2人ずつである。6組の夫婦の平均結婚年数は8年6ヶ月であり、最短で6年半、最長10年である。家族の構成に関しては、(A) 夫妻の両方が子どもを連れて結婚した(夫妻とも実親かつ継親である)ケースが3組、(B) 夫側のみ子どもを連れて結婚した(実父と初婚継母)ケースが2組(うち1組は現在の夫婦間の子どもの間もなく出産予定)、(C) 妻側のみ子どもを連れて結婚し、後に子どもが生まれたケースが1組となっている(夫側の子どもは離婚後に元妻と同居しており、夫はこの子と面会交流していない)。また、(A)のうち2組と(B)のうち1組は夫が配偶者との死別を経験している(他の再婚者は離婚経験者である)。(A)には夫あるいは妻の元配偶者と同居の子どもとの面会交流が行われているケースがそれぞれ1組ずつ含まれ、(C)は同居する妻の子どもと元配偶者の親との面会交流が継続している。「第二次インタビュー調査」時点における子どもたちの年齢は、(C)の1夫婦に新たに生まれた子どものみが就学前であるが、それ以外の子どもたちは14歳から24歳までの年齢幅に収まっており、ちょうど思春期から青年期にあっている。

以上のように、6組の家族という少数の事例であるが、そこにはステップファミリーの家族構成や家族状況の多様なパターンが含まれている。ただし、夫婦の結婚時に同居していた子

もたちのすべてが、最近あるいは現在、思春期を経験していることから、家族発達段階には比較的共通の条件を備えている事例群であるとも言える。

3. 分析

以下では、今回のインタビューのなかから浮かび上がってきた主要な知見の概要を、(1) 子どもの成長と継親子間の葛藤、(2) 職業キャリアと家族キャリア、(3) 親世代との関係、(4) 離別後の別居親子関係、の4点に絞って考察する。

(1) 子どもの成長と継親子間の葛藤——思春期を経て「大人の関係」へ

子どもの成長は、ステップファミリーに限らず、一般に家族の発達段階を移行させ、家族の生活構造を変化させる原動力であると見なされてきた(森岡 1973)。子どもが中学生から高校生にあたる時期は、次第に親からの精神的な自立が促される思春期ということもあり、また受験などの進路問題も絡んで、一般に親子間の関係のあり方が大きく変容するため困難を生じやすいと考えられている。今回のステップファミリーの分析においても、思春期の子どもと継親(とくに継母)との関係の難しさが比較的大きなテーマとして浮かび上がったケースが6家族中の4家族(Aタイプ3組とBタイプ1組)あった。

例えば、夫婦が2人ずつの子どもを連れて再婚したAタイプの家族の例では、結婚後間もなく当時中学2年生だった夫の息子と妻(継母)との間に大きな感情的葛藤が生じたことが「第一次インタビュー調査」でも語られていた。妻は、「最初は(継子にとって)すごくいいお母さんにならなきゃ」と意識し、「『ママ』って言われるまでは私はまだお母さんになれないんだ

わとか、すごい、力づくでも（『ママ』と）言わせようぐらいに思ったときがあった²⁾と言うように、継子の「お母さん（ママ）」になることに強いこだわりを抱いていた。それに対して中学生だった継子は、継母のしつけに反発して部屋に閉じこもり、夫によれば「取っ組み合いになりそうな」「一触即発の」感情的な葛藤状況に至っていた。このケースでは、高校受験期の数ヶ月と高校3年間の時期、この子が下宿で一人暮らしをするなどして、父親や継母とは離れた生活を体験した。

その間、現在に至るまで、夫は単身赴任で1～2ヶ月に1度しか自宅に帰れない状態が続いているが、この子の大学進学とその姉の就職を契機に、その2人が元の家に戻って継母とその子ども2人（現在、高校生）を含めた合計5人が一緒に暮らす生活が数ヶ月前から始まった。妻は、思春期に葛藤を経験した継子との現在の関係について、「何かはじめはもっとぎくしゃくするかしらと思ったんだけど、何となくずっと前からそこにいますよ、みたいな感じで」「大人になったなあとあって」と余裕をもって振り返ることができる安定した関係になった。今では継子の「お母さん」になることへのこだわりが消え、現在の自分は「お母さんのような、大きな先輩のような、親戚のおばさんのような」存在だと言う。また「今は何かお父さんが2人ずついてもお母さんが2人ずついても、もっといてもいいかなって感じで」と、この数年間の家族観の変化を説明する。夫も「一時ダメかと思ったものがまた奇跡的にまた元に戻ったというのが今の状態」と述べる。

このケースと同様に、それぞれ2人の子ども（いずれも高校生と中学生）を連れて結婚したAタイプ夫婦の夫の息子（結婚当時中学2年生）は、中学時代に3回の家出を繰り返した。親の再婚により、世帯メンバーが増えるなど、

生活の急激な変化に直面したこの子は、自分の居場所がなくなったと戸惑い、「家族のなかでいたたまれなくなったのかなと思った」と夫（父親）は振り返る。

結婚後、順次離家して「早く自分の世界が作れた」上の（継）きょうだいよりも年齢が下で、「一番長いことみんなとつきあわなきゃならなかったの、そこのしんどさもあった」のかもしれない。夫には、「（この子一人が家を）飛び出したりしているけど、みんなの気持ち（を代弁しているの）やろうな」、「みんながやる分を自分が全部代わりにやってやったという感じ」に思えたと言う。だから、家出を責めるよりもあえて何も聞かずに見守ることにし、家出をきっかけに、帰宅時間の門限をなくすなど、この夫妻がそれまでに設定していた生活習慣のルールを少しずつ緩和することにした。

現在は大学生になって一人暮らししているこの子について、妻（継母）は「中学2年生というのは（中略）すべてのものに対してつんつんしてるのね。それでつんつんつんつんしてただけど、その頃は。今は別につんつんはしてない。大人になったから。だけど別にとくに親しくどうのとか、そういうことはないんだけど」と関係の変化を語っている。関係が「深まる」というよりも「慣れたという感じ」だと言う。

最初はやっぱり子ども（継子）も子どもだったから、すごい溝があるというか慣れてないというか。だけど今はそれぞれそれなりに大人に、なりきれてない人もいますが、一応年がだんだん経ってきたので、すごいこなれてきたというか、だから別にふつうに見たらふつうの家族だし、みんなしゃべるし。「会社でこんなことがあって」と言って、他の子もそれを聞いて「ふーん」とか。

今は一人暮らししているためにめったに会わない継子たちにとって、自分は「彼らのお父さんと一緒にいる大人という感じかな」と妻(継母)は言う。そして、「昔は反発をもって捉えていたと思うんだけど、今は別に反発なく、そこにいるお母さんなんだというふうに捉えていると思うんです」と説明している。

と同時に、子どもたちが家からいなくなると、「精神的に余裕が出て」きて「楽ちん」だと思えるようになった。また、「ステップファミリーとしての問題は継子との関係」であったが、継子たちが進学・就職して自立するようになって、日常生活の面倒をみる負担がなくなると、「ステップファミリーの直面する課題というのは(自分の家族には)今のところはない」と言うまでに変化した。子どもたちのほうも、家を離れて自活するようになってからは、帰省すると最年長の娘が年下の(継)きょうだいの面倒をみるようになり、(かつて家出をした継子が)「お父さん、今までありがとう」と感謝を言葉にするようになるなど、「すごい大人になった」と妻はその成長を実感している。

こうした「大人の関係」への変化は、子どもの加齢の効果、子どもが離家して生活空間を分離した効果、共有時間の長期化による効果などの複合的な効果によるものとみられる。ただし、思春期の継親子関係はすべて同じように困難なわけではないし、その変化も多様性が大きい。上記のケースに関しても、継親との強い葛藤が表面化するのには複数いる継子のうち1人だけである。

Bタイプのステップファミリーで、結婚時に夫のみに息子が3人(小学年2人と中学生1人)いた継母のケースでは、どの継子も思春期に「大きなトラブルとかもなかったし、逆にあまりそういう反抗期とかなくて本当に大丈夫かな、っていうぐらいに思っていましたので」と

言うように、継子たちとの関係で深い悩みを経験していない。それでも、3人の継子がすべて離家した現在、子どもとの関わりの変化を次のように述べている。

やっぱり子どもがちっちゃいときとかは、やっぱりお母さんの役割を求められることが多いし、(継母は母親とは)違うって言ったってやってることは一緒だから、そこの(現実と気持ちの)ギャップですよね。(中略)やっぱりその社会的なモラルとして、こういう関わりでこの家族にいるのに「お母さん」でなくていいのか、っていうのとか、そういうのもあってそう思ってたんですけど、やっぱり彼らが成長するにあたって、別にだんだんそういう役割的なところは少なくなってくるでしょう。そうすると現実と精神が合ってくるんですよ。だんだんこっちに近寄ってくるっていうか。だからそうすると全然そんなこと考えなくなったっていうか。

継親と継子のいずれの立場から見ても、関係の歴史の浅い大人が「親」(のような存在)として急に関わろうとするとともに継親子関係特有の難しさがある。親から自立した自己を意識し始める思春期に、継親子関係形成の時期が重なれば、より大きな困難が生じていても不思議はない。ただし、緊張関係の強度あるいは深刻度は、後述するように家族を取り巻くネットワークの状況など、家族が置かれているいくつかの条件や家族が取る行動によって異なってくるように見える。にもかかわらず一般的には、子どもの成長や関係の歴史が長くなるにつれて次第に緊張関係が緩和される傾向にある。そこに、親密で情緒的な関係ができるかどうかは別にしても、つきあい方や役割関係の安定化のようなも

のがみられるケースが多かった。

(2) 職業キャリアと家族キャリア——就職・退職・出産による変化

思春期における困難が、再就職や出産など、夫妻のライフイベントと関連して生じる例がいくつもあった。

例えば、Bタイプの継母は、夫の2人の子どもたち（現在、高校生と中学生）が小学校低学年のときに結婚して専業主婦をしてきた。継子たちがある程度大きくなり「手が離れてきた」ため、結婚3年目に再就職した。就職先は思いのほか忙しく、平日は帰宅が遅く、土日も休みがとれない状態が続くようになった。夫や継子たちも当初は再就職に賛成していたものの、妻が仕事で家を空けることが多くなると、次第に継子たちから「寂しいっていう態度が出始め」る。とくに下の継娘は、中学校の部活動を休みがちになり、また部活動を言い訳にして学校からの帰宅時間が遅くなるとともに、学校で友人とトラブルを起こすようになった。そして、インタビューの前年（結婚7年目）には家出してしまう。

継子の家出は自分の不在が原因だと感じた妻は、「これ以上は絶対続けられない」と考え、それまでの正社員勤務から時間的に融通のきくパートタイム勤務へと異動を願い出た。仕事をセーブし、家庭で夫や継子たちと過ごす時間を優先するようになる。「第一次インタビュー調査」では、結婚初期の継母が不在の場合既存の家族メンバーが仲よく団欒していることを知って継母が疎外感を感じるというエピソードがこの事例以外の複数の事例において見られた。しかし、妻の再就職後に思春期の継子が家出したというこのエピソードにおいては、継母の不在が他の家族メンバーに情緒的な影響を与えており、妻が家族内のメンバーにとっていかに重要

な存在になっているかを示している。継子たちは自分を「一番信頼をしてくれていると思う、大人のなかで」と妻自身は自認している。継子たちが幼少だった結婚前からの出会い以来、10年以上にわたる継母子関係の歴史があるこの家族に生じた問題は、思春期の継親子に生じがちな、役割関係を無理に作ろうとすることから生じる摩擦問題とは異質なもののようにみえる。

ステップファミリーの夫婦に新たな子どもが生まれるというライフイベントも、親子関係や継親子関係に影響を及ぼす。小学生の娘2人を連れて再婚したCタイプのステップファミリーの妻は、夫婦に子どもが生まれた後の1年間ほどは、育児方針をめぐって夫婦間の対立が増したと言う。彼女は当時を次のように振り返っている。

ちょうど一緒になって1年ぐらい、1年半、もうちょっとかな、2年にならないぐらいで3番目が生まれたじゃないですか。セメント（ベビー）³⁾の上の子が生まれて、それでそこから1年、夫婦仲が悪くて、娘たちもちょうど思春期、ちょうど小6と小4の終わり、〇月に生まれているから下の子が。それで中学上がってって、何となく女の子って小学校の高学年から中学校2年生ぐらいまでちょっと何かいろいろあるじゃないですか。そういう何かぐっちゃぐっちゃした時期があったんですけど。でも全員と仲が悪くなるんじゃないくて、4人の中でどこかとどこかがぶつかると、どこかがフォローに入るみたいな感じで、この四角形がきれいに回っていた感じ。それでやってみましたね。だからそういうふうにかこうぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃしながらも誰かしらがフォローに入って、みたいな、ガーッと3、4年ぐらいそんな感じで

動いて行って、で、一番下が〇〇年に生まれて、結婚して5年ですよ。4年目か？ちょうど4年ぐらいのときに生まれて、そこで全部が落ち着いた感じですよ。

新たな子どもの出生とその後の育児の時期が、初期の混乱状態にある家族関係と上の子どもたちの思春期や高校・中学受験に重なって、夫婦関係や親子関係が落ち着かない経験を通り抜けたが、数年を経た今は随分安定したと妻には感じられている。一方、(一時的に同居している)自分の両親と他の家族メンバーとの関係を尋ねられた夫は、「(新たに生まれた)チビ2人が真ん中にいて、対角線上にもうちょっと大きい(継子たちと)大人たちが、(夫の)父親——おじいちゃん、おばあちゃんが、周りにいるというような構図」に収まりつつあると答えている。少なくとも夫には、新たに生まれた子どもたちが夫の両親と他の家族メンバーをつなぐ役割を果たしていると感じられているようである。

(3) 親世代との関係——祖父母と孫関係・嫁姑関係

上記の家族の場合もそうだが、子どもたちの祖父母など親族ネットワークがステップファミリーの継親子関係や夫婦関係の変化に強く関連しているように見える例がいくつもあった。冒頭に紹介したAタイプの家族では、亡くなった夫の元妻の両親(夫の子どもたちの祖父母)が孫を心配するあまり夫の子どもたちに内緒で食事や小遣いを与えることがあり、また夫自身の親も妻の母親としての役割遂行について批判することがあったため、子どものしつけをめぐる妻(継母)と継子の葛藤が次第に継母と祖父母との対立へと拡大し、その間に夫が挟まるというかたちで「代理戦争」的様相を帯びるよう

になった(Nozawa 2008)。このケースでは、継母が亡くなった母親に関する高い評判を周囲から聞かされて、今は亡き相手(実母)との間で「よりよい母親」をめぐる競争に駆り立てられた。それに加えて、好き嫌いの多い孫の好みをよく知っている祖母と料理の腕を争うような状況から家族形成を開始したことが、当初の継母子間の葛藤を加熱させたように思われる。

一方、上述した思春期の継子たちと大きなトラブルを経験しなかったBタイプのステップファミリーの妻(継母)にとっては、結婚以来同居しており、結婚以前から母親代わりとして3人の孫(継子)たちに大きな影響力を行使してきた夫の母(姑)との関係が大きなストレス源であった。しかし、姑と張り合わずに、継子たちとも一定の距離を保って「お母さん」になろうとしなかったために、母親役割をめぐる競争に巻き込まれるのを回避でき、継母子間にあまり葛藤を生じなかったようにみえる。ただし、同居する孫(継子)たちに姑が自分に対する批判や不満を話しているに違いないので、それを継子たちが「鵜呑みに」しているかもしれないと思い、そのことを「子どもがどういふふうに捉えているのか知りたいけど聞けない」状態が続いていた。ところが、継子のうちの2人が就職と大学進学で引っ越しするのを手伝った際に、その2人と親しく話す機会ができた。

そしたらまあ上の(継)子が、ずっとおばあちゃん(姑)の隣の部屋にこう暮らしてたんで、(おばあちゃんが)「何か四六時中文句言ってた」と、隣の部屋で。「すごい自分は聞こえてくるのが気分が悪かったけど、まあできるだけ、こう(聞かないように)ということを考えてたけど、あれについて〇〇さん(継母の呼び名)はどう思っているんだろう、ってずっと思ってた」っ

で言ってたんですよ。だからまあ子どもの方が賢いなと思って（笑）。だから何か私、心配することなかったなと思って。だからまあ日ごろの自分と彼らとの関係っていうのが、ちゃんとやってれば、別にその他から評価されることを鵜呑みにしないんだなっていうのがわかったので、すごい気が楽になったというか。そこで結構子どもたちと仲よくなったので（笑）。

この継母は、10年間の継子たちとの関係を振り返って、「もともとその、親子という関係でもない、感覚ではないのに加えて、彼らが大人になってきたので、より大人の関係になったのかなという気はしますね」と述べる。そこには、こうした小さなタブーを口に出せる関係へと変化したことも含まれている。

アメリカなどに比べると、日本では（とくに夫婦の離別・死別後のひとり親家族の時期に）子どもの祖父母と同居する傾向が強い。そのせいもあって、日本のステップファミリーの家族形成においては、「家族境界の曖昧さ」（Pasley 1987）が世代間に生じやすくと考えられる。そのため、誰が子育てに責任をもっているのかについて曖昧さと対立が生じ、それがストレスをもたらす（Nozawa 2008）。そうした緊張状況は、程度は様々だが、子どもが成人する時期に至ってようやく解消するというほど長期にわたることがある。

（4） 離別後の別居親子関係

日本的な「家族境界の曖昧さ」問題の典型が、姑と嫁や（継）親と祖父母のように世代間にあるとするならば、離婚後の元夫婦間の共同親権を前提とするアメリカなどでは、夫婦離別後の親子関係の維持（面会交流など）をめぐる世代内（元配偶者間あるいは現在の配偶者と元配

偶者の間など）で生じることが多い。しかし、日本においても面会交流を実施する例は珍しくなくなり、それを肯定する社会規範も高まってきた（菊地 2008）。ただし、同居していない親子の面会交流に関する法制度が確立しておらず、それを支援サービスも未発達な現状では、アメリカなどに比べると、指針が不明確で不透明な実践という性格を残している（日弁連法務研究財団 離婚後の子どもの親権及び監護に関する比較法研究会編 2007）。そのような日本社会の現状において、面会交流の実践がどれほど長期的に行われ、それを当事者である親や継親がどのように意味づけ、評価しているかという点は、今後の制度のあり方を模索する上でも注目される。

もう1組のAタイプのステップファミリー夫妻は、結婚当初から夫の娘たちがその実母（離婚した元妻）と定期的に面会交流を行ってきた。結婚7年目に、上の継子が高校に入学してしばらくすると生活習慣や態度が乱れ始め、見かねた妻（継母）がそれを正すことが多くなる。それに対して「うちは厳しいけど、結局お母さん（実母）のほうは何も言われないので、『私は向こうに行きたかったのに』とかそういう感じで」、その子は実母の家に引っ越してしまった。妻が「自分のやり方がまずかったのかも」しれないと言うように、この出来事によって、それまでの継母役割を否定的に捉えるようになる。そして、自分がどれだけ努力しても「結局何もやってくれなくても、お母さん（実母）がいいんだ」と思うようになる。

それからは、下の継子も実母宅へ泊まりに行ったり、学校の長期休暇中のアルバイトも実母宅に近い実母の両親（継子の祖父母）宅から通ったりするなど、徐々に交流は頻繁になっていった。引っ越してますますルーズになる生活習慣について夫妻が正すと、継娘たちは「へそ

を曲げちゃう」し、連絡しても「(実母宅から)いつ帰ってくるかもわからない…。妻は次第に自分自身を「ご飯つくって、洗濯して、学校に送り出すだけの「身の回りのお世話係」だ」と思うようになった。これまで実母との面会交流を積極的に進めてきたことを肯定的に評価できない気持ちが生じているようである。

その背後には、①継子たちの「身の回りの世話」のみが継母である自分に降りかかり、情緒的絆が実母へと向かうかたちで母親役割が分裂していること、②父親(および継母)と母親の間に連携が不在であることを利して思春期の継子が大人の統制をすり抜けてしまっていることからくる不満と無力感があるとみられる。この事例は、子育て・教育の方針や責任分担について、離婚・再婚後の父母間でコンセンサスを形成することが重要であることを示唆している。そのため仲介サービスなど、面会交流のための社会的支援制度の整備を検討する必要があるだろう。

一方、今回のインタビュー事例のなかには、妻の子どもが再婚後も実父やその両親(子どもの祖父母)と定期的に交流している事例が複数あった。離婚後継続的に実施している例もあれば、子どもが一定の年齢になってから会わせるようになった例もある。継父である夫から面会交流に否定的な意見はとくに表明されなかったが、妻やその子どもたちは夫(継父)に遠慮がちに面接交流している例も見受けられた。ステップファミリーにおける面会交流の是非についての社会制度や社会通念が明確でないことから緊張が生じる例が少なくないと推測される。仲介サービスの利用可能性が高まれば、こうした緊張も緩和される可能性がある。

4. 結語

思春期を経て青年期へと子どもが成長するに

ともなって、継親子関係、親子関係、夫婦関係がどのように変容するかを、インタビュー事例を基に検討してきた。多くの場合、子どもの思春期における親子関係および継親子関係の難しさが重要な問題として浮上する経験をしていることがわかった。とりわけ、特定の継子と継母の関係が問題の焦点となって顕在化する傾向がある。

しかし、ほとんどの事例において、子どもが思春期を抜け出して成人期へ移行することが、家族をさらに新たな局面へと導くことも明らかになった。つまり、子どもが「成長」して「大人」になったことによって、「大人の関係」が築かれたと認識される段階である。それは、必ずしも関係の深まりと捉えられているわけではなく、緊張しない関係、距離が縮まった関係、ごくしゃくしない関係への変化、あるいは単に「慣れ」などと捉えられることが多い。しかし、子どもの思春期に継親子間や夫婦間の葛藤がとりわけ強烈なものであった場合には、この変化は劇的で「不思議な」ものと感じられてもいる。

その一方で、こうした子どもの成長にともなう変化は、それ以外の多くの出来事や条件と絡み合って進行する。子どもの離家、妻の就業や出産、親世代(子どもの祖父母)など親族(あるいは非親族)の関与、離別後の親子の面会交流の実施状況などによって、ステップファミリー内の家族関係の変遷に多様性がもたらされている。

本稿では紙幅の関係で考察できなかったが、ステップファミリー形成の初期に当事者支援団体に接触したことが、その後の家族形成の方針に長期的な影響を及ぼした可能性も大きい(野沢 2009 a, 2008 a; 菊地 2003参照)。この点を含めて、さらに詳細で広範な分析を試みるのが今後の課題となっている。

【注】

- 1) 本研究プロジェクト「ステップファミリーにおける家族形成プロセスの研究——5年間の変化にみるストレスとサポート」は、日本経済研究奨励財団より奨励金を受け（2007年度／代表：野沢慎司）、同時に明治学院大学社会学部附属研究所の一般プロジェクト（2008年度補完研究／代表：野沢慎司）として研究助成を受けた。両機関からの支援に心より感謝する。また、インタビューとして調査の一部に参加した共同研究者の茨木尚子教授のご協力に感謝したい。
- 2) 引用文中の（ ）は、筆者が文脈を補った部分を示している。以下同様。
- 3) 2001年11月にSAJが開催した講演会において、アメリカのステップファミリー支援団体SAAの会長（当時）、マージョリー・エンゲル氏が、アメリカではステップファミリーに新しく生まれた子どもは、家族メンバーの全員と血縁でつながっており、家族の結束を固める存在であるという意味で「セメント・ベビー（a cement baby）」と呼ばれることがある、と紹介して以来、日本のステップファミリー当事者の間でこの用語が広まった。

【文献】

- Ahrons, C. R., 2004, *We're Still Family: What Grown Children Have to Say about Their Parents' Divorce*, Harper Collins. (寺西のぶ子監訳, 2006, 『離婚は家族を壊すか——20年後の子どもたちの証言』バベル・プレス。)
- Arnaut, G. L. Y., Fromme, D. K., Stoll, B. M., and Felker, J. A., 2000, "A Qualitative Analysis of Stepfamilies: The Biological Parent," *Journal of Divorce & Remarriage*, 33 (3/4) : 111-128.
- Baxter, L. A., Braithwaite, D. O., and Nicholson, J. H., 1999, "Turning Points in the Development of Blended Families," *Journal of Social and Personal Relationships*, 16 (3) : 291-314.
- Braithwaite, D. O., Olson, L. N., Golish, T. D., Soukup, C., and Turman, P., 2001, "Becoming a Family: Developmental Processes Represented in Blended Family Discourse," *Journal of Applied Communication Research*, 29 (3) : 221-247.
- Felker, J. A., Fromme, D. K., Arnaut, G. L., and

- Stoll, B. M., 2002, "A Qualitative Analysis of Stepfamilies: The Stepparent," *Journal of Divorce and Remarriage*, 38 (1/2) : 125-142.
- Fine, M. A., and Schwebel, A. L., 1992, "Stepparent stress: A cognitive perspective," *Journal of Divorce and Remarriage*, 17 (1/2) : 1-15.
- Ganong, L. H., and Coleman, M., 2004, *Stepfamily Relationships: Development, Dynamics, and Interventions*, New York: Kluwer Academic/Plenum Press.
- 早野俊明, 2006, 「ステップファミリーと法制度」野沢慎司・茨木尚子・早野俊明・SAJ編『Q&A ステップファミリーの基礎知識——子連れ再婚家族と支援者のために』明石書店, 39-53。
- 茨木尚子, 2008, 「少数派の組織化とインターネット——オンライン・セルフヘルプグループの可能性と課題」宮田加久子・野沢慎司編『オンライン化する日常生活——サポートはどう変わるのか』文化書房博文社, 47-78。
- 茨木尚子・吉本真紀, 2007, 「NPOにおける家族支援とソーシャルワーク——ステップファミリー当事者による支援組織の活動から」『ソーシャルワーク研究』32 (4) : 44-309。
- 菊地真理, 2003, 「ステップファミリーのセルフヘルプグループ——当事者が経験する「変化」とSAJの役割」『明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻紀要』27 : 29-38。
- 菊地真理, 2005, 「継母になるという経験——結婚への期待と現実のギャップ」『家族研究年報』30 : 49-63。
- 菊地真理, 2008, 「離婚後の別居親子の接触の賛否を規定する要因——JGSS-2006を用いた分析」, 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編, 『日本版General Social Surveys 研究論文集 [7]——JGSSで見た日本人の意識と行動』大阪商業大学比較地域研究所, 93-105。
- 菊地真理, 2009, 「ステップファミリーにおける家族関係の形成と対処支援の研究——継母のストレス対処過程のメカニズム」博士論文（奈良女子大学大学院人間文化研究科）。
- Levin, I., 1997, "The Stepparent Role from a Gender Perspective," *Marriage and Family Review*, 26 (1/2) : 177-190.
- 森岡清美, 1973, 『家族周期論』培風館。
- 日弁連法務研究財団 離婚後の子どもの親権及び監護に関する比較法的研究会編, 2007, 『子ど

- もの福祉と共同親権——別居・離婚に伴う親権・監護法制の比較法研究』日本加除出版。
- Nielsen, L., 1999, "Stepmothers: Why So Much Stress? A Review of the Research," *Journal of Divorce and Remarriage*, 30: 115-148.
- 野沢慎司, 2002 (改訂版2004), 「ステップファミリーにおけるストレスとサポート・ネットワーク」ソーシャル・サポートにおけるCMC研究グループ編『ステップファミリーにおけるソーシャル・サポートの研究——オンラインとオフラインのサポート・ネットワーク』特別推進プロジェクト「現代社会における技術と人間」明治学院大学社会学部付属研究所, 28-48。[<http://www.meijigakuin.ac.jp/~stepfam/result/ch04.pdf>]
- 野沢慎司, 2006, 「ステップファミリーの現実と援助」日本家族心理学会編『夫婦・カップル関係——「新しい家族のかたち」を考える [家族心理学年報24]』金子書房, 91-101。
- 野沢慎司, 2008a, 「インターネットは家族に何をもたらすのか——ステップファミリーにおける役割ストレインとサポート・ネットワーク」宮田加久子・野沢慎司編『オンライン化する日常生活——サポートはどう変わるのか』文化書房博文社, 79-116。
- 野沢慎司, 2008b, 「ステップファミリー研究の動向——アメリカからの視点」『家族社会学研究』20 (2) : 71-76。
- 野沢慎司, 2009a, 「プロジェクト化・ネットワーク化する家族とコミュニティ——ステップファミリーの支援とリーダーの役割」高橋勇悦・内藤辰美編『地域社会の新しい〈共同〉とリーダー』恒星社厚生閣, 131-149。
- 野沢慎司, 2009b, 「家族下位文化と家族変動——ステップファミリーと社会制度」牟田和恵編『家族を超える社会学——新たな生の基盤を求めて』新曜社, 175-201。
- Nozawa, S., 2008, "The Social Context of Emerging Stepfamilies in Japan: Stress and Support for Parents and Stepparents," In Pryor, J.(ed.), *The International Handbook of Stepfamilies: Policy and Practice in Legal, Research, and Clinical Environments*, John Wiley & Sons, 79-99.
- 野沢慎司・春日清孝・宮田加久子・浦光博・茨木尚子, 2003, 「ステップファミリーにおけるオンラインとオフラインのサポート」『研究所年報』(明治学院大学社会学部付属研究所) 33 : 227-243。
- 野沢慎司・茨木尚子・早野俊明・SAJ編, 2006, 『Q&Aステップファミリーの基礎知識——子連れ再婚家族と支援者のために』明石書店。
- 野沢慎司・永井暁子・菊地真理・松田茂樹, 2006, 「ステップファミリーの家族過程と関係形成」野沢慎司・茨木尚子・早野俊明・SAJ編『Q&Aステップファミリーの基礎知識——子連れ再婚家族と支援者のために』明石書店, 55-111。
- Papernow, P. L., 1984, "The Stepfamily Cycle: An Experiential Model of Stepfamily Development," *Family Relations*, 33 : 355-363.
- Pasley, K., 1987, "Family Boundary Ambiguity: Perceptions of Adult Stepfamily Members," K. Pasley and M. Ihinger-Tallman (eds.), *Remarriage and Stepparenting: Current Research and Theory*, Guilford Press, 206-224.
- Pasley, K., and Ihinger-Tallman, M., 1982, "Stress in Remarried Families," *Family Perspective*, 16 (4) : 181-190.
- ソーシャル・サポートにおけるCMC研究グループ編, 2002 (改訂版2004), 『ステップファミリーにおけるソーシャル・サポートの研究——オンラインとオフラインのサポート・ネットワーク』特別推進プロジェクト「現代社会における技術と人間」明治学院大学社会学部付属研究所。[<http://www.meijigakuin.ac.jp/~stepfam/result/result/index.html>]
- Visher, E. B., & Visher, J. S., 1991, *How to Win as a Stepfamily* (2nd ed.), Brunner/Mazel (春名ひろこ監修・高橋朋子訳, 2001, 『ステップファミリー——幸せな再婚家族になるために』WAVE出版。)
- Whitsett, D., and Land, H., 1992, "Role Strain, Coping, and Marital Satisfaction of Stepparents," *Families in Society: Journal of Contemporary Human Services*, 73 (2) : 79-92.